

芸術を地域発展の梃子とする

人口爆発時代の到来

約二三〇年前の一八世紀末期にイギリスの経済学者ロバート・マルサスが『人口論』を発表した。人口は幾何級数で増加するが食料は算術級数でしか増加しないので、食料が不足する事態は確実に実現するという有名な内容である。科学技術の発展で食料生産が算術級数以上の増加をしているので、マルサスの予測ほどではないにしても、現在の地球では人口の一割が飢餓状態にあり、マルサスの理論は的中している。

それから約一七〇年後の一九六八年にアメリカのスタンフォード大学の生物学者ポール・エーリックが『人口爆弾（ザ・ポピュレーション・ボム）』という書籍を発表し、さらに

一九九〇年に『人口が爆発する！（ザ・ポピュレーション・エクスプロージョン）』という続編を発売した。地球の現実がマルサスの理論のように展開していることを説明した内容である。当時の世界の人口は五三億人であったが、現在では八三億人と一・六倍に爆発している。

地域を発展させる 関係人口

ところが最近になり、この人口爆発に変化が発生してきた。人口は現在も増加しているが、エーリックが『人口爆弾』を発表した時期に世界の人口増加の比率が毎年二・三％で頂点となって以後、減少しはじめ、現在では〇・九％にまで低下し、人口総数も頭打ちに接近してきた。しかも二〇二四年の調査によると、国

別では世界全体の七七％に相当する一八三カ国では増加傾向にあるものの、二三％の五四カ国は減少に転換しているのである。

日本も減少国家であり、その減少人数は年間五五万人程度であるが、一定規模以上の国家の減少比率では世界二位である。さらに分析すると二〇二五年に都道府県単位で増加しているのは東京と千葉のみで、それ以外は減少に移行している。もちろん人口だけが地域のすべてではないが、日本では明治時代初期から一五〇年が経過した最近まで人口全体が四倍弱の増加であり、地域単位でも増加が常識であったから、これは巨大な転換である。

そこで登場してきたのが「関係人口」である。これは他所から移住してくる「定住人口」でもなく、観光

このような長期に継続する芸術活動は日本には存在しないが、アートフェスティバルとかアートフェアと総称される多種多彩な芸術行事が開催されている。二〇〇五年から開催されている「アートフェア東京」は一四〇以上の画廊が参加して過去から現代までのさまざまな芸術作品を売買する催事であり、横浜では都市政策として二〇〇四年から「クリエイティブシティ・ヨコハマ」を開催し、多数の人々が参加する行事になっている。

このような規模ではないが、全国各地で芸術によって地域に活性をもたらす活動もある。その最初ともいべき事例は岡山県玉野市の眼前の直島にある「地中美術館」である。岡山市に本社のある通信教育の老舗ベネッセコーポレーション（旧・福武書店）は、瀬戸内海にある直島の開発を構想し、クロード・モネの『睡蓮』を中核とする西洋絵画を展示する美術館を建設した。景観を阻害しないように建物は地中に建設する配慮をし、地域の目玉になっている。

福島県西会津町では、世界各国のアーティストが廃校に滞在して創作活動をする「西会津国際芸術村」を二〇〇四年から運営している。高知県黒潮町は公募したデザインを一〇〇枚にもなるTシャツに印刷して、太平洋岸の広大な砂浜にロープを張っただけの「砂浜美術館」で展示する「Tシャツアート展」を一九八九年から開催している。以前は「砂浜しかない田舎」であった黒潮町は、その白浜によって有名になっている。

グレコの『受胎告知』を展示する大原美術館、ミレーの『夕暮れに羊を連れ帰る羊飼』を展示する山梨県立美術館などが象徴するように、日本には高額な有名芸術作品を購入して観客を誘致する時代が存在した。しかし最近では地域に根差した芸術活動によって、関係人口を増加させようという活動が活発になっている。それは日本の地域の成熟を意味するとともに、地域の活動の本質を象徴する時代の開始を明示するものである。

関係人口を創出する 地域の芸術活動

で短期の訪問をするような「交流人口」でもなく、地域と長期に継続して関係する人口と定義されている。この関係人口を増加させることが人口減少に直面している地域の重要な目標になっており、多彩なアプローチが試みられている。その一例が芸術を地域発展の梃子として活用しようという戦略である。以下に数例を紹介したい。

欧州では女優として有名なギリシャのメルナ・メルクリリ文化大臣が提唱、EU（欧州連合）が主導して一九八五年に「欧州文化首都」という構想が企画された。これは毎年、特定の都市を欧州文化首都に選定してさまざまな芸術活動を展開する活動で、一九八五年のアテネを最初として、以後、フィレンツェ、アムステルダム、グラスゴーなど欧州各地の都市で毎年開催され、二〇三三年まで開催都市が確定している一大芸術活動になっている。

東京大学名誉教授
つきお よしお
月尾嘉男



昭和一七（一九四二）年生まれ。東京大学工学部卒業。工学博士。コンピュータ・グラフィックス、人工知能、仮想現実、メディア政策等を研究することともに、全国各地で私塾を主宰し、地域の有志と共に環境保護や地域計画に取り組む。